かしの木園
創立50周年記念誌

心をつないで未来をひらく

橿原市子ども総合支援センター
こども発達支援課

目次

1. 教育長のことば 2

2. はじめに 3

3. 施設のあゆみ 4

4. 現在の取組 6

5－1. 個別療育チームの活動 12

5－2. 集団療育について 18

5－3. 学会参加レポート 20

6. ボランティア橿原の皆様への深い感謝を込めて 22

【寄稿】かしの木園　創立 50 周年を祝して　　ボランティア橿原　会長　中谷　千栄子　氏

7. 御礼 23

8. おわりに（編集後記） 24

1. 教育長のことば

祝辞：創立 50 周年を迎えて

かしの木園が創立 50 周年の大きな節目を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

本施設は、昭和 50（1975）年の開設以来、半世紀の長きにわたり、子どもたちの健やかな成長を支える拠点として、極めて重要な役割を果たしてまいりました。

つきましては、今日に至るまでお子様一人ひとりの個性に寄り添い、情熱を持って支援に携わってこられた歴代職員の皆様、そして施設の活動を温かく支えてくださる等、保護者および地域の皆様の献身的なご尽力に対し、深く敬意を表し、感謝申し上げます。

本施設の歩みは、子どものねがいや支援ニーズに応えるためのたゆまぬ研鑽の歴史でもあります。その過程において、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・臨床心理士、そして保育士といった多職種におよぶ専門職が加わり、支援体制はより多角的で厚みのあるものへと発展してまいりました。身体・動作・言葉・心、そして日々の遊びや生活といったあらゆる側面から、それぞれの専門性を生かしたアプローチを重ねることで、今日の本市における発達支援の確かな礎が築かれております。

いかに時代が変わろうとも、子どもたち一人ひとりの日々の小さな成長を尊び、その歩みを共に見守り続けるという本施設の姿勢は、開設以来変わることなく受け継がれてまいりました。ここで育まれた「できた！」という喜びや、ご家族の皆様と共に歩んだ確かな足跡は、本市の教育・福祉におけるかけがえのない財産であります。

教育委員会といたしましては、この 50 周年を新たな出発点とし、誰もが個性を認め合い、共に学び、共に生きる「共生社会」の実現に向け、より一層の支援体制の充実および学校教育との円滑な連携に努めてまいる所存です。

結びに、かしの木園が、これからも子どもたちの笑顔があふれ、ご家族にとって希望の光であり続けることを切に願うとともに、関係する皆様のますますのご健勝とご多幸を祈念し、お祝いの言葉といたします。

令和8年2月27日

橿原市教育長　吉田徳弘

2. はじめに

暦の上では春とはいえ、まだ寒さの残る今日このごろ、当施設は創立 50 周年という大きな節目を迎えることができました。本年は市政施行 70 周年という慶事とも重なり、このような記念すべき年にこれまでの歩みを振り返る一冊を刊行できますことは、関係者一同、大きな喜びでございます。

昭和の時代に産声を上げた当施設は、半世紀という長い年月、地域の子どもたちとそのご家族に寄り添い歩んでまいりました。時代の変遷とともに、現在は「子ども総合支援センター」内へと移転し、より多角的な支援が行える体制へと進化を遂げております。場所や形は変わっても、一人ひとりの個性を尊重し、健やかな成長を願う私たちの志は、開所当時から変わることなく今日まで受け継がれています。

この 50 年間、私たちが歩みを止めることなく活動を続けてこられたのは、ひとえに保護者の皆様の信頼と、地域住民の皆様、そして関係諸機関の多大なるご支援・ご協力があったからこそです。本誌には、これまでの感謝の気持ちとともに、子どもたちが当施設で描いた笑顔の記録と、歩んできた歴史を収めさせていただきました。

現在、子どもたちを取り巻く環境は多様化し、支援の重要性はますます高まっています。50 周年は通過点に過ぎません。私たちはこの節目を機に、今一度原点に立ち返り、これからも困りごとを抱える子どもたちやご家族にとっての「安心の拠点」であり続けるよう、決意を新たにしております。

結びに、本誌作成にあたりご寄稿・ご協力を賜りました皆様に深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げ、発刊の挨拶とさせていただきます。

令和 8 年 2 月27日

橿原市子ども総合支援センター　センター長　　広瀬　秀夫

3. 施設のあゆみ

原点は、一途な志。 有志たちの手による産声

かしの木園の歩みは、一枚の図面でも、大きな予算でもなく、昭和 48 年 9 月に数人の有志による小さな「ボランティア活動」から始まりました。有志の「困っている誰かの力になりたい」という思いと、障がいを持つ子どもの子育てに困っている保護者とのつながりの中で「この街に、こうした場所が必要だ」――。そんな純粋な想いから始まった活動の輪は、次第に行政を巻き込み、大きなうねりとなりました。

何もないところから、手探りで積み上げてきた日々。形なき想いが「施設」という形になった 50 年前のあの日は、まさに情熱の結晶、産声だったのだろうと容易に想像ができます。50 年も経った今では資料に残る記録はわずかかもしれませんが、その志は、今も私たちの理念の中に脈々と息づいています。

かしの木園の理念は、現在の重要事項説明書にも記載しておりますが、「利用者の人格を尊重し、常に利用者の立場に立った支援の提供に努めるとともに、利用者及びその家族等保護者のニーズを的確にとらえ、利用者が必要とする適切な支援を提供する」というものです。

住所：橿原市久米町 678

◆旧かしの木園　施設概要◆

敷地面積　　1661.65㎡

建築面積　本館　223.17㎡(鉄筋2階建)　別館136.00㎡(鉄筋平屋)　合計359.17㎡

述べ床面積　本館　306.26㎡　別館136.00㎡　合計442.26㎡

◆沿革◆

昭和 48 年度(1973)　9 月　ボランティアで訓練指導開始
昭和 49 年度(1974)　橿原市の事業として「市老人憩いの家」で訓練指導を実施
昭和 50 年度(1975)　5 月　かしの木園　竣工
昭和 50 年度(1975)　10 月　心身障害児訓練施設「かしの木園」開設
平成 15 年度(2003)　支援費制度施行　児童・デイサービスとして訓練指導を実施
平成 18 年度(2006)　障害者自立支援法施行　介護給付(児童デイサービス)として
訓練指導を実施
平成 20 年度(2008)「発達障害者支援体制整備事業」の受託
ペアレント・トレーニングの実施
かしの木園の療育手法をまとめた「もありんく」作成
平成 24 年度(2012)　児童福祉法に規定する児童発達支援事業として訓練指導を実施
平成 25 年度(2013)　橿原市子ども総合支援センター整備工事着工
(白橿南小学校北新館の改築工事)
奈良県立医科大学との医師派遣に関する覚書調印
橿原市子ども総合支援センター整備工事竣工
平成 26 年度(2014)　橿原市子ども総合支援センター開所
平成 30 年度(2018)　教育支援課と子ども療育課(かしの木園)の二課体制を
「こども発達支援課」の一課体制へ機構改革

◆年間利用者(契約人数)の推移◆

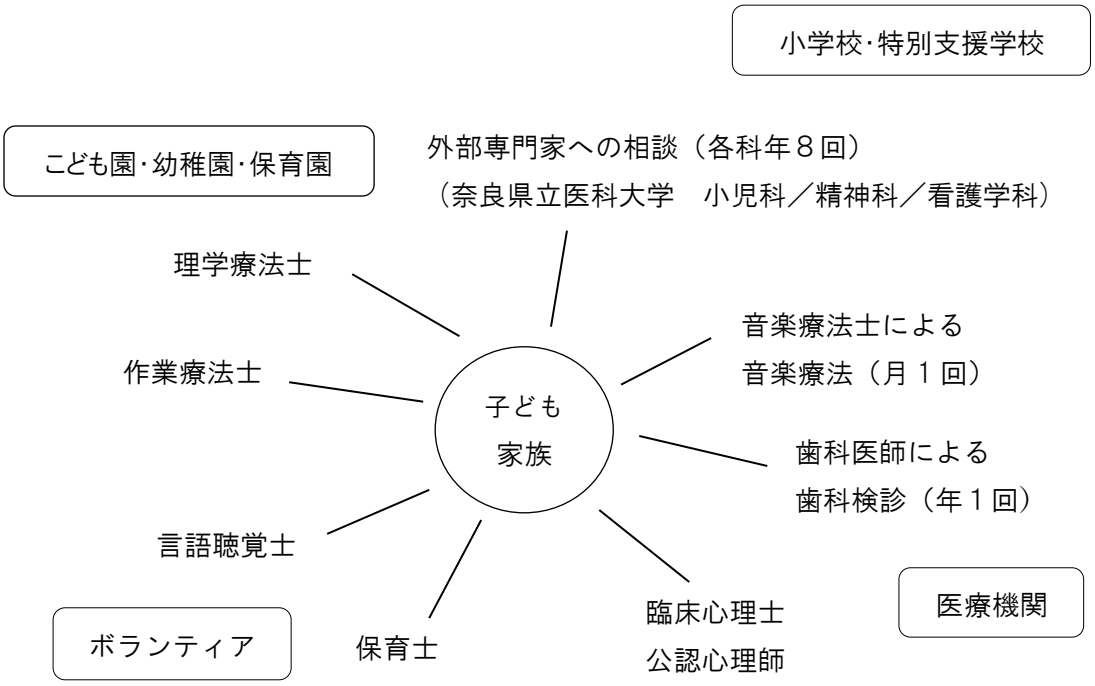
旧かしの木園	昭和 50 年度 (1975)	平成 13 年度 (2001)	平成 22 年度 (2010)	平成 25 年度 (2013)
人数	43	76	105	190

子ども総合支援センター移転後

現かしの木園	平成 26 年度 (2014)	平成 27 年度 (2015)	平成 28 年度 (2016)	平成 29 年度 (2017)	平成 30 年度 (2018)
人数	220	191	197	227	210

令和元年度 (2019)	令和2年度 (2020)	令和3年度 (2021)	令和 4 年度 (2022)	令和 5 年度 (2023)	令和 6 年度 (2024)
185	208	232	221	217	211

4. 現在の取組



子どもたちの在籍するこども園・幼稚園・保育園や就学先である小学校等、医師・看護師や療法士等、子どもたちをとりまく様々な関係機関と連携を図り、保護者と相談しながら取り組んでいます。地域密着型の療育施設という利点を生かし、地域に根ざしたきめ細やかな療育を通して豊かな心を育み、自立への土台づくりをめざしています。

療育の実施においては、児童発達支援ガイドライン(こども家庭庁)に基づいた「個別支援計画書」及び「専門的支援実施計画書」を作成し、個に応じた療育を提供しています。児童発達支援事業の実施にあたっては、「育ちの支援」「子育ての支援」が共通項であり、保護者・家族の希望聴取と子どものニーズを把握し、個別療育担当者・集団療育担当者による関わり及び発達評価等の情報を基に子どもの状態に応じて計画を作成しています。これらの計画を、家庭支援や関係機関等の「横の連携」また、移行支援等の「縦の連携」の基本ツールとし、他機関にも支援の内容や流れが確認できるようにしています。

＜かしの木園　職員構成･職員数＞　26 名　　令和8年2月現在

管理者	児童発達支援管理責任者 （臨床心理士･公認心理師）	理学療法士	言語聴覚士
1名	2名	1名	2名
事務	保育士	作業療法士	臨床心理士
1名	13名	5名	1名

【個別療育部門】

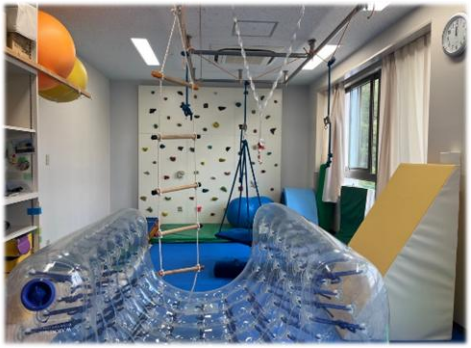
○　理学療法士による個別療育

　生まれもった心身の状態、病気、ケガなどによって、何らかの困難や運動発達の遅れがある子どもに対し、潜在的な能力を最大限に引き出しながら、筋力・バランス能力の向上、運動学習、リラクゼーションによる姿勢や痛みの改善等の理学療法プログラムを通じて、日常生活動作に関わる運動能力を高めます（寝返る・起きる・座る・立つ・歩く・階段昇降など）。

　対象児が自発的な遊びや活動の中で、満足感や達成感を経験しながら、様々な姿勢や基本動作、体の操作を学習できるよう療育を行っています。

○　作業療法士による個別療育

　発達過程の中で、困り感をもつ子どもや育児の悩みをもつ家族が、楽しく生活できることを目指します。子どもの行動や情緒、学習の課題を、運動機能や脳機能などの支援から理解し、その子どもの’just right challenge‘（ちょうど良い挑戦）を通して発達を支援します。また、ご家族や先生方と連携して子どもが過ごしやすい環境づくりをお手伝いします。



○　言語聴覚士による個別療育

遊びを中心にしたプログラムを通じて、「ことばにして話すことができるように」「発音が上手にできるように」「聴いたことが理解できるように」「ことば以外のコミュニケーション手段を獲得できるように」など、コミュニケーションがより楽しく円滑に図れるように取り組みます。また、摂食・嚥下機能の発達に支援が必要な子どもの評価を行い、口腔機能の育ちに合わせて食事を楽しめるよう助言を行っています。

○　臨床心理士による個別療育

子どもの発達状況や心理状態に応じた療育を行います。子どもが主体となった遊びを中心に、個々の好きな活動・遊びを通して気持ちの発散、解放をしながら情緒の安定が図れるように取り組みます。発達段階に応じたコミュニケーションや遊びを通じて、充実感や達成感、感情体験を共有して、発達が促進されるよう土台をつくっていきます。

【集団療育部門】

少人数集団で遊びを中心にした活動を行い、一人ひとりに合わせた遊具や素材を使いながら、子どもの持っている力を広げ高められるように関わっています。

<table>
<tr><th>療育のねらい</th><th>療育形態</th></tr>
<tr><td>1～3歳児
情緒豊かに育っていくよう、いろいろなあそびを保護者や保育者と一緒に楽しみながら、子どもの発達を援助しています。</td><td rowspan="2">保護者同室または保護者分離療育
（60～100分／1回）

※子どもの様子やグループの状態に合わせて保護者の同室・分離を行っています。
※理学療法を受けている子どもへの集団療育も行っています。</td></tr>
<tr><td>4～5歳児
社会性が豊かに育っていくよう、生活や遊びの経験を広げ、友達や保育者とのふれあいを大切にしながら、子どもの発達を援助しています。</td></tr>
<tr><td colspan="2">【基本内容】自由設定あそび、リズムあそび、運動あそび、手あそび、絵本の読み聞かせなど
【設定療育】季節を感じるあそび、からだ・感触あそび、ルールのあるあそび、園外療育など</td></tr>
</table>

【その他の取り組み】

・発達評価（個別療育担当専門職による評価）

臨床心理士、作業療法士、言語聴覚士、理学療法士の専門的評価から子どもの「良さ」や得意なこと、苦手なことを分析し、子どもとの関わり方や支援の方法など発達に関する相談等を実施しています。

・ケア会議

子どもたちの在籍するこども園・幼稚園・保育園や就学先である小学校等の関係機関や、通園児が利用する相談支援事業所と連携をもち、情報共有を行いながら総合的な支援を検討するためのケア会議を実施しています。

・保護者支援（行事や保護者研修会など）

保護者同士の交流の場、育児不安の解消につなげていく場として保護者や職員との交流の場を設定し、情報交換を行っています。

【利用状況】

	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
療育利用児のべ数（人）	5,291	5,116	5,619	5,654
ケア会議・参観（人）	66	144	226	175
保護者個別相談（人）	90	46	203	186

【子ども総合支援センター施設概要】　　住所：橿原市白橿町８丁目 19－1

敷地面積：3817.44 ㎡
建築面積：574.58 ㎡
延べ床面積：975.31 ㎡

① 機能訓練室
② 研修室１・２
③ 訓練準備室
④ 相談室１・２
⑤ 医務室
⑥ 職員室
⑦ 感覚統合訓練室
⑧ 言語訓練室
⑨ 療育室1～4
⑩ ボランティア室
⑪ プレイルーム１・２
⑫ 幼児療育教室

療育の様子

5－1. 個別療育チームの活動

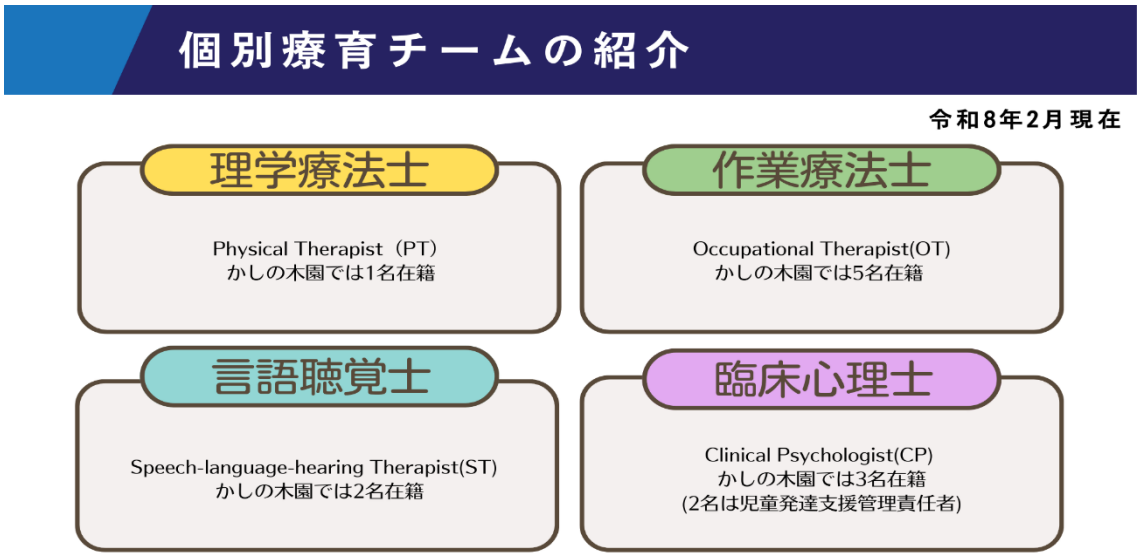
理学療法士　稲留　雅仁

1.　はじめに

児童発達支援事業所「かしの木園」は、お子さん一人ひとりが地域社会の中で自分らしく、健やかに生活していける未来を目指し、地域各機関との密接な連携を軸としながら、集団療育と個別療育を通してその成長を多角的に支援しています。個別療育チームでは、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士といった多職種が連携し、個々のニーズに応じた専門的介入を個別療育で実践しています。創立 50 周年を迎え、個別療育チームが日頃取り組んでいる内容を改めて振り返り、今後の展望を共有したいと思います。

2.　個別療育チームについて

個別療育チームでは、お子さん一人ひとりの発達段階や得意・不得意に合わせた、さまざまな活動や遊びを通して、達成感や自信を育みながら丁寧な個別支援を行っています。個別療育チームには、現在 11 名の専門職が在籍しています。



【理学療法士】筋力、関節可動域の改善・バランス能力の向上・痛みの改善（回復）などを通して、日常生活動作（起きる・座る・立つなど）、歩行などの運動機能を高めます。

【作業療法士】遊びを中心とした活動を通して、上肢機能や感覚統合機能、学習能力などの発達を促進します。

【言語聴覚士】コミュニケーション力（ことばの理解・表現、構音、きこえ等）の発達を、遊びや身体を使った活動を通して促します。

【臨床心理士】遊びを通じて、子どもの様子や発達課題に応じた経験を積み重ね、情緒の安定、自尊心の向上を促します。

3．個別療育チームのカンファレンス

「かしの木園」では、個別療育担当職員が集まり、定期的なカンファレンスを実施しています。このカンファレンスは、個別療育の質をさらに向上させるための重要な場であり、通園されているお子さん一人ひとりに還元できるよう、常に工夫を凝らしています。カンファレンスの目的は、単にお子さんの支援方法を検討するだけではありません。多職種の専門家が集まることで、お子さんに対して多角的な視点を持ち、より細やかな支援ができるようにする事が最も大切な目的となっています。具体的には、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士など、異なる専門職が集まり、各職種ならではの視点から支援方法を共有・議論します。現場で実践している知識や経験をもとに、具体的な事例を挙げながら意見交換を行う事は、職員同士の連携を深めるだけでなく、支援方法のバリエーションを広げる大きな役割を果たしています。この多職種によるアプローチが、個別療育をより効果的にする鍵となっています。

4．集団療育チームとの合同カンファレンスや療育間連携

「かしの木園」では、情緒や社会性を育む集団療育と、個々の発達課題に深く向き合う個別療育を並行して実施しています。それぞれのチームは、単に療育を分担するだけでなく、より質の高い支援を追求するために日々研鑽を積んでいます。その中核を担うのが、集団療育と個別療育の垣根を超えた合同カンファレンスです。集団活動における保育士の視点と、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士の専門的な知見を融合させる事で、一方の視点だけではたどり着けない、多角的な支援プログラムが立案されています。また、個別療育を担う専門職が集団療育の現場に入りこみ、保育士と共に活動内容や環境設定を再考するという実践的な取り組みにも力を入れています。こうした多職種間の連携や相互研鑽によって「かしの木園」の療育は、深みのある支援へと日々進化をし続けています。

5．外部の研修会や学会への参加

お子さん一人ひとりの健やかな成長を支えるためには、施設という枠を超えた多くの知見や新しい情報を取り込み、支援内容を常にアップデートし続ける必要があります。そこで「かしの木園」では、職場内でのカンファレンスや連携を基盤としつつ、外部の研修会や学術大会への参加も積極的に推進しています。個別療育を担う職員は、積極的に学びの門戸を広く開き、外部で得た多様な学術領域や最新の支援技術を吸収し、自分たちの実践を客観的な指標で照らしつつ研鑽に励んでいます。今年度は、日本小児理学療法学会学術大会や日本作業療法学会においてポスターでの口頭発表を行った個別療育担当職員もおり、日々の実践を学術的視点から再考する機会を得ました。こうした取り組みが既存の療育スタイルを客観的に見直す契機となり、療育活動をより良いものにしています。お子さん一人ひとりが異なるように、支援における正解も決して 1 つではありません。職員一人ひとりの支援の引き出しを増やす事は、目の前のお子さんが抱える困難さに対し、より多角的なアプローチを見つけ出す力へと直結します。外部の最新の知見を取り入れることによって、職員一人ひとりの専門性が高まり、それが直接的にお子さんの療育に役立っていると個別療育チームは感じています。

【令和 7 年度　外部研修会・学術大会の活動報告（個別療育担当者）】

第 12 回日本小児理学療法学会学術大会への参加、現地でのポスター発表

第 59 回日本作業療法学会への参加、現地でのポスター発表

令和 7 年度強度行動障害支援者養成研修修了

日本吃音・流暢性障害学会第 13 回大会への参加

日本遊戯療法学会第 30 回大会への参加

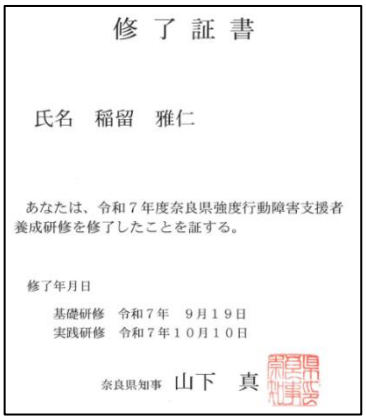
第12回
日本小児理学療法学会
学術大会 in 愛知

参　加　証

第 12 回 日本小児理学療法学会 学術大会 in 愛知に
参加されたことを証明します。

2025年12月20日(土)～21日(日)

第12回 日本小児理学療法学会学術大会
大会長 藪 中 良 彦
(大阪保健医療大学)


修 了 証 書

氏名　稲留　雅仁

あなたは、令和７年度奈良県強度行動障害支援者養成研修を修了したことを証する。

修了年月日

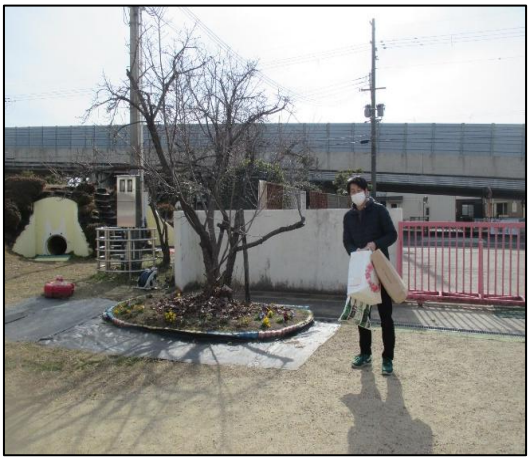
基礎研修　令和７年　９月１９日
実践研修　令和７年１０月１０日

奈良県知事　山下　真

6．かしの木園ならではの強み：地域との繋がりと連携

教育委員会所属という特徴を活かし、「かしの木園」の個別療育担当者は、地域のこども園・幼稚園・小中学校・特別支援学校、地域の医療機関との繋がりを大切にしています。具体的には、各施設へ直接足を運び、現場の先生方と一緒に、活動や学習への支援内容を考えます。

また、子ども総合支援センター内で行われる市内教職員向け研修会では、「かしの木園」の療育担当者が講師として登壇し、専門的な知識を保育・教育に活用してもらえるように取り組んでいます。ここから新しい連携が生まれる事も少なくありません。子どもたちを取り巻く環境の変化や、家族が抱える課題の多様化が進む中、「かしの木園」の個別療育担当者は専門的な知見を基盤とし、多方面に連携を図る事で多角的に支援を行う体制を整えています。



7．個別療育チームの活動と成果

私たち個別療育チームは今日に至るまで、きめ細やかな支援を追求してまいりました。日々の生活の中では、どうしても埋もれてしまいがちな特性や小さなサイン。それらを丁寧に拾い上げ、専門的な知見をもってお子さん一人ひとりにあった個別のアプローチを実践し、環境を整える事にも注力してきました。これまでの活動を振り返ると、その成果は単なるスキルの獲得に留まりません。子どもたちの表情、職員の眼差し、そして園全体を包む空気感の変容として、確かな手応えを感じています。

保護者さんから、「最近、子どもの笑顔が増えました」「自分から挑戦する姿を見せてくれるようになりました」というお言葉をよくいただきます。こうした温かいお言葉は、私たち個別療育チームにとって何よりの喜びであり、お子さんが確かな成長を遂げている証でもあります。これは単なる一場面的な現象ではなく、個別療育という濃密な関わりの中で、自分の欲求が正しく理解され、身体面や精神面への専門的かつ適切なアプローチが同様に行われた事で可能となった、子どもたちの「やりたい」が「できた」に変わる成功体験の積み重ねの効果であり、内面からの自信が、穏やかで輝くような笑顔へと繋がっていったと私たちは考えています。また、このような個別の詳細なアセスメントに基づく専門的な介入や環境調整を経て、子どもたちはチャレンジする事や探索行動へと足を踏み出す事ができたのではないかとも考えています。好奇心に従って自ら動く。この能動的な姿勢こそが、遊びや学びを深める最大の原動力となります。探索範囲が広がることで、「かしの木園」の子どもたちの世界は、点から線へ、そして豊かな面へと劇的に広がっています。お子さんが自分自身の力で未来を切り開けるよう、これからも専門性と愛情をもって療育に励みたいと思います。

私たちの活動は、療育の中だけで完結するものではありません。校園の先生方と連携し、日々の生活環境をどう改善するかを共に考える支援も重視してきました。 訪問時には、理論を振りかざすのではなく、現場の先生に寄り添いながら具体的かつ実践的な提案を心がけています。専門職と現場の先生が対等なパートナーとして対話を重ねることで、支援の質がボトムアップで向上していく好循環が活動の成果として生まれています。

8．これからの課題

これまでの成果は、私たちが目指す大きな目標の通過点に過ぎません。児童発達支援の世界は日々進化しています。私たちは現状に満足することなく、最新の知見や技術をどん欲に吸収し続けなければなりません。外部研修会への積極的な参加や、職場内でのカンファレンスの定例化を通じ、より高度で専門的な知識を身につける事に注力してまいります。一人ひとりが「特定の分野におけるスペシャリスト」でありながら、「全体を俯瞰できるジェネラリスト」、そんなプロフェッショナルを目指します。

連携強化に関しては、関係機関とのネットワークをより強固にし、情報共有や研修の機会を提供することで、地域全体の支援の輪の拡大に貢献していきたいと考えています。私たちは、個別療育チームの活動を通じて、子どもたちの可能性に限界がないことを改めて教えられました。 子どもが笑顔になり、自ら広い世界へ踏み出していく。それらを支える事は、私たち職員にとっても、自らの成長を実感できるかけがえのない喜びです。これからも、子どもたち一人ひとりが自分らしく咲き誇れるような土壌を一緒に作っていく。そして、その情熱を地域全体へと波及させ、誰もが安心して育ち、育てられる社会を築いていくために、私たちはこれからも少しずつ着実に前進してまいります。

9．さいごに

かしの木園では、個別療育チームの活動を通じて、お子さん一人ひとりに対するきめ細やかな支援を提供しています。その背景には、多職種の連携や地域との協力があり、私たちが目指す支援の質の向上が日々進められています。創立 50 周年を迎え、これからも地域と連携し、さらに成長し続けるために努力を続けていきます。私たちの取り組みが、未来を担う子どもたちの健やかな成長に少しでも役立つことを願っています。

5－2. 集団療育について

保育士　田中　香

1.　集団療育の概要

集団療育は、状況に合わせて個別に対応することも可能な小集団の中で、育ちの課題に応じた取り組みをする場と考えています。1～3歳児クラスは毎週1回9：30～11：10の約1時間半で活動しており、先生、友達と一緒に遊びながら、情緒豊かに育っていくよう子どもの発達を援助していきます。4・5歳児クラスは隔週の月2回13：30～15：10の約1時間半の時間の中で、友達とのふれあいを大切にしながら、生活や遊びの経験を広げ、社会性が豊かに育つように援助しています。どのクラスも保育士が3～4名担当し、場合に応じて、他の専門職も入りこみ、共に療育をつくっていくようにしています。2つの部屋を使って、同じ時間帯に2クラス開催している状況です。

2.　集団療育のねらい

・人と活動する楽しさを感じる
・スモールステップで、小さな「できた！」を積み重ね、自信につなげる
・集団生活に必要なソーシャルスキルの獲得
・模倣による学び
・自己表現する力
・自己調整力（気持ちをコントロールする力）
・コミュニケーション能力の獲得

かしの木園に来ている方の多くが就園されており、並行通園されています。私たちのねらいとしているこれらの力を、園・所より小さな集団で、より細やかな援助を受けながら身に着けていってほしいと願っています。

3.　一日の流れとその内容

療育前に、クラス担当者同士で療育準備をした後、クラスリーダーが考えた日案に基づいて、活動内容や個々のねらいについての最終打ち合わせをしています。

9:30（13:30）～10:10（14:10）　自由遊び・片付け・トイレ
10:10（14:10）～　始まりの挨拶・活動の流れを知る
10:20（14:20）～　設定遊び
10:55（14:55）～ 11:10（15:10）　絵本・終わりの挨拶
※（　）は午後のクラスの時間

療育後はその日の療育の振り返りや個々の姿の共有をクラス担当者間で行い、次回の療育の内容や方向性を話合って決めていきます。その後、集団の記録、個別毎の記録をしていきます。リーダーは日案の評価、反省も記入し、次回の日案を作成していきます。

4．集団療育の中でのかかわりにおいて大切にしているポイント

集団療育では、子どもたちとかかわる中で、以下のことを大切にしています。

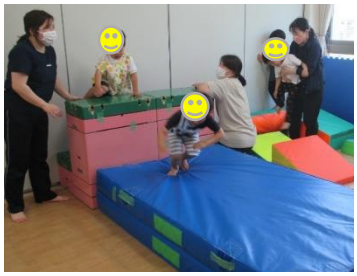
・あたたかい雰囲気で［思いを表現しやすい環境］
・自信を育てる ［丁寧に認める声掛け］
・目で見てわかりやすく ［注目しやすい導入。イラスト入りの見通しのもてる予告］
・どんな感覚が好き？かアセスメントする
・かかわる時は 「穏やかに」「近づいて」「静かなトーンで」
・言葉かけは少なめに ［大人の声も刺激になることを忘れずに］
・子どもの言動に巻き込まれない ［冷静に、落ち着いて］
・楽しい気持ちが自分からやってみたいという気持ちにつながる
・小さな「できた！」を子どもや保護者とともに喜びあう

5．療育設定において大切にしているポイント ～保育所や幼稚園との違い～

園での集団生活は、発達のゆるやかさや偏りがある子どもたちにとって、大人数の子ども達の活動に参加することができ、たくさんの刺激を受けられる反面、120％の力で背伸びをしながら頑張っている子どもも多いです。かしの木園では、一人ひとりに応じたきめ細やかな支援を行い、スモールステップでの成功体験を積み重ねていけるようにしています。また、発達状況に応じた支援、いわゆる生活年齢だけでなく、発達年齢に合わせた遊びを取り入れて子どもたちにとって刺激的で、充実感のある活動になるように日々工夫して関わっています。また多職種がいる強みを活かして感覚統合の要素を取り入れた支援、感覚統合を促す運動、感覚遊びも多く取り入れています。

設定遊びでは、

・社会性と協調性を養う集団遊び
・日常よく行う動作を取り入れた遊び
・触覚を刺激して基礎感覚を鍛えられる遊び
・身体を大きく動かし、筋肉の使い方を知ることができる遊び
・目の能力の向上につながる遊び



などを取り入れています。集団での遊びは、社会性の発達と感覚統合に重要な役割を果します。

順番を待つ、他者と協力する、ルールを守るなどの活動は、社会的スキルと感覚処理能力を同時に発達させるために、かしの木園では、サーキット遊びや、ごっこ遊び（ままごと、お医者さんごっこ、お店屋さんごっこ など）、ボール運び、水運び、マット押し、ゴムゴム、バルーン、フープ、ハードル遊び、散歩、箱積み、鬼ごっこ、かくれんぼ、砂場遊び、水遊び、ゲーム遊び（オセロ、椅子取りゲーム、マット取り、だるまさんが転んだ、マッチングゲーム）などを行っています。

家庭や園などの実生活では、着替えをする、箸を使うなど、指先から腕、足を巧みに動かす微細な運動が求められる場面がたくさんあります。発達にゆるやかさや偏りがある子どもたちは、細かな運動が苦手な場合が多いため、こうした実際の生活の中で直面する問題を解決していけるような支援が大切であると感じています。

5－3. 学会参加レポート

学会発表を通して見えた、かしの木園の療育と不登校支援への広がり

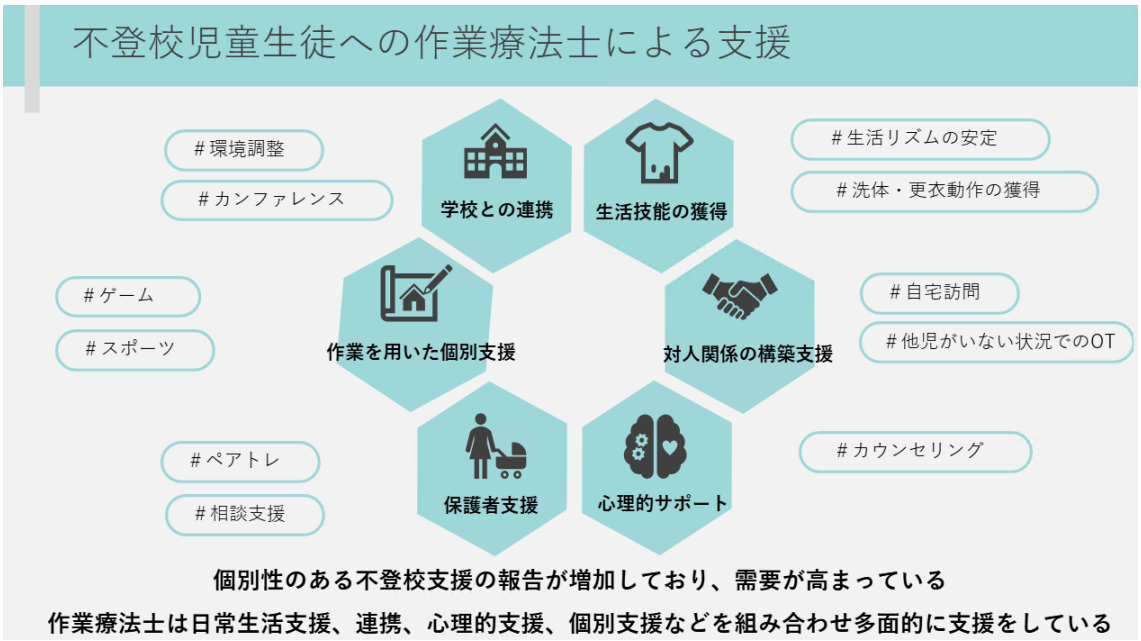
作業療法士　阿部妃里

かしの木園は、今年で創立 50 周年を迎えました。かしの木園は、公設公営の児童発達支援事業所として、未就学児を対象に、発達段階や生活背景に応じた療育を継続的に行ってきました。行政、医療、教育、福祉といった多職種・多機関との連携が可能である点は、民間事業所では得難い大きな強みであり、包括的かつ継続的な子ども支援を実現できる環境が整っています。

私は作業療法士としてかしの木園に勤務する傍ら、大学院で研究を続けています。その一環として、先日開催された作業療法学会に参加し、「作業療法の価値を高めるエビデンスの創出」という学会テーマのもと、「不登校支援に関する作業療法士の役割」をテーマにしたスコーピングレビューを発表しました。

不登校は、現在、日本全国で多くの子どもたちが直面している出来事です。文部科学省の調査によれば、国内には約 34 万人の不登校の小・中学生がいるとされています。これらの子どもたちが抱える困難さは個別で多様であり、その背景には家庭や学校、社会環境などが絡み合っています。今回は、国内での不登校支援における作業療法の現状と課題を整理しました。特に印象的だったのは、作業療法士の介入は単独の手法で完結するものではなく、複数の場所で行われていたという点です。学校や家庭、医療機関、教育支援センターなどのさまざまな機関との連携が不可欠であり、それによって支援の効果が最大限に発揮されるという示唆を得ました。普段、かしの木園で関わっているのは未就学児が中心であり、不登校の児童生徒と直接関わる機会は多くありません。しかし、発達早期からの支援が、学童期・思春期における不適応や不登校の予防につ

ながる可能性があることを、研究と学会での議論を通して改めて実感しました。学会発表後には、研究者や教育関係者から直接声をかけていただき、不登校支援における作業療法士の関わりや、地域連携の在り方について意見交換を行うことができました。こうした対話は、自身の研究を深めるだけでなく、日々の療育実践を見つめ直す貴重な機会となりました。橿原市では、不登校に関する条例が制定され、支援体制の充実に向けた取り組みが進められています。かしの木園で行っている発達早期からの丁寧な療育や、関係機関との連携は、将来的な不登校支援とも地続きの取り組みであり、その意義は今後さらに高まっていくと考えています。



かしの木園には、自己研鑽を積極的に行うことができる職場環境があります。学会参加や研究活動で得た知見を、日々のカンファレンスや意見交換を通して療育者全体で共有し、療育の質向上へと還元する文化が根付いています。私自身も、大学院での学びと現場での実践を往還しながら働くことができており、研究と臨床が密接につながる実感を得ています。さらに今年 3 月には、不登校の児童生徒が利用する「居場所」において実施したプレインタビュー調査について、日本発達系作業療法学会での発表を予定しています。未就学期から学童期、そして思春期へと連続する子どもの育ちを見据え、作業療法士としてどのような支援が可能なのかを、今後も探究していきたいと考えています。

50 周年という節目を迎えたかしの木園が、これまで培ってきた実践と、研究に基づくエビデンスを重ね合わせながら、地域全体で子どもを支える拠点として、これからも歩み続けていけるよう、作業療法士として貢献していきたいと思います。

6. ボランティア橿原の皆様への深い感謝を込めて

かしの木園は、本年をもちまして創立 50 周年という大きな節目を迎えることができました。この半世紀にわたる歩みは、地域の皆様とともにあり、そして何より、活動を足元から支えてくださったボランティア橿原の皆様の献身的なご協力があったからこそ成し遂げられたものです。心より深く感謝申し上げます。

振り返れば、私たちが歩んできた 50 年は、社会環境が激しく変化した激動の時代でもありました。そのなかにあって、皆様には一貫して変わらぬ温かさで、私たちの事業に寄り添っていただきました。

特に、こどもたちの託児においては、豊かな愛情をもって多くの子育て家庭を支えてくださいました。皆様の存在があったからこそ、保護者の方々は安心して子どもの相談や療育に踏み出すことができました。また、数々のイベント運営においても、皆様の細やかなお気遣いと行動力が、子どもや保護者の方、職員の笑顔と活気を生み出す大きな原動力となってまいりました。

公共機関としての私たちの役割は、皆様のような志あるパートナーの存在なくしては果たせません。50 年という長い歳月、共に活動し、有意義な時間を分かち合ってきた皆様は、私たちにとって単なる協力者を超えた「かけがえのない家族」のような存在です。

この 50 周年を一つの通過点とし、私たちはこれからも地域のために歩みを進めてまいります。皆様には、今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

会員の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げ、創立 50 周年の節目に際しての感謝の言葉とさせていただきます。

【寄稿】 かしの木園　創立 50 周年を祝して

ボランティア橿原　会長　中谷　千栄子

かしの木園の皆様、創立 50 周年という誠に喜ばしい節目を迎えられましたことを、会員一同心よりお祝い申し上げます。

このたびは、私たちの活動に対し身に余る光栄な感謝のお言葉をいただき、ありがとうございます。私たちがこれまで託児やイベントのお手伝いを続けてこられましたのは、ひとえにかしの木園の皆様が、常に私たちを信頼し、活動の場を提供してくださったからに他なりません。

私たちボランティア橿原は、この記念すべき年をもちまして会としての活動を終了いたします。長きにわたり活動を支えてくださった施設スタッフの皆様、そして交流させていただいた全ての皆様に、深く感謝申し上げます。

活動は終わりますが、この施設が築いてきた 50 年の歴史を誇りに、私たちはこれからも地域の一員として歩んでまいります。本当にありがとうございました。

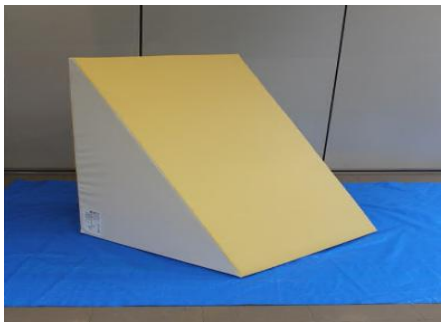
7. 御礼

かしの木園は、昭和 50 年の開設以来、地域の皆様に支えられ、このたび創立 50 周年を迎えることができました。

この半世紀の間、多くの団体・個人の皆様より温かいご寄附や多大なるご支援を賜りましたこと、心より深く感謝申し上げます。

頂戴いたしましたご厚意は、子どもたちの療育環境の整備や、行事の充実、日々の活動を支える大切な道具として、大切に活用させていただいてまいりました。皆様の長年にわたる深いご理解と愛情が、子どもたちの笑顔と健やかな成長の礎となっております。

次の 50 年に向けて、職員一同、より一層地域に根ざした支援に邁進してまいる所存です。今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げ、感謝の言葉とさせていただきます。



8. おわりに（編集後記）

市政施行 70 周年、そして当施設創立 50 周年という記念すべき年に、こうして一冊の記念誌をお届けできることを、編集委員一同心より嬉しく存じます。

編纂にあたり、これまでの歴史を紐解くと、そこにはいつの時代も子どもたちの健やかな成長を願う多くの方々の情熱がありました。教育長から寄せられた温かなメッセージをはじめ、施設の歩みや現在の取り組みを整理する中で、改めて当施設が地域に根ざし、支えられてきたことを再確認する貴重な機会となりました。

本誌では、日々の支援活動のみならず、より質の高い療育を目指した「学会参加・発表」の記録も掲載いたしました。現場での実践を学術的な視点から検証し、未来の支援へと繋げていく私たちの姿勢を感じ取っていただければ幸いです。

また、日頃から多大なるお力添えをいただいているボランティア団体の皆様、そして温かなご支援を賜りました寄附団体の皆様へ、誌面を借りて深く感謝申し上げます。皆様の善意こそが、子どもたちの笑顔を支える大きな力となっております。

「子ども総合支援センター」という新たな拠点において、私たちはこれからも、困りごとを抱える子どもやご家族の心に寄り添い、歩みを止めることなく支援の輪を広げてまいります。

最後になりましたが、本誌の作成にあたり多忙な中ご協力いただいたすべての皆様に、厚く御礼申し上げます。この一冊が、当施設の歴史を語り継ぐ一助となれば幸いです。

令和 8 年 2 月27日
記念誌編集委員 一同

発行日：2026年2月27日
発行元：児童発達支援事業所「かしの木園」
所在地：〒634-0051
奈良県橿原市白橿町8丁目19-1
電話：0744-27-8585

コドモ
ソウゴウ
シエン
センター